

まえがき

漢方薬局業界では、「現代中医学って素晴らしい！」と中医学を無条件に受け入れている風潮があります。が、そもそも現代中医学というのは何を意味しているのでしょうか？

陰陽五行学説や臓腑経絡学に基づき、疾病の診断を弁証論治に基づいて行えば現代中医学なのでしょうか？

私は、日々の漢方相談の際には、常に相談者の実体を診ることを心がけています。それは漢方相談の際に使用している中医学理論は、相談者の実体とかけ離れて展開される思弁性を有しているからです。

中医学理論は非常に便利であり、自分たちが都合のいいように何とでも解釈できる抽象的な部分が多分にあることを忘れてはいけません。

このことに気づき、吉益東洞が空理空論だと喝破した事実を真摯に受け止め、中医学理論にて相談を行う際には、実体を的確に捉えるべく正確に運用しなければなりません。

また私は、漢方相談の根底は中医学理論にあり、中医学派である自負がありますが、そもそも漢方薬局・薬店では純粋な現代中医学を実践するのは不可能です。現代中医学による治療では、証に従って、各生薬の薬効や性質を考え、種々薬対を上手に組み合わせる1つの方剤を作っていきます。

しかしながら漢方薬局・薬店では、エキス剤であれ、煎じ薬であれ、法律による規制により自由自在に生薬を組み合わせることが許されていないのです。つまり中医学理論に基づいて弁証はできたとしても、その先の論治においては相談者にとって最適な生薬の組み合わせを行うができないという治療の根底に関わる制約があるのです。

その制約のため、漢方薬局・薬店では、古方派と同様に現在、許可販売されている既存の漢方製剤を患者の状態に合わせていくという「方証相對」「随証治療」を実践せざるを得ないのです。つまり我々漢方薬局・薬店の漢方療法では、「論治」の部分においては古方派に近い処方運用を行なっているのです。

これらの事実から、漢方薬局・薬店における漢方相談においては、純粋な中医学理論に基づく

「弁証」は可能であつても「論治」が不可能であり、医師系漢方とは違った形で漢方を実践しなければなりません。

このような事情から、薬系漢方では中医学と日本漢方を融合させた独自の理論を展開することが必然的に求められるのです。

さらにこれから先は、言葉遊びに陥る危険性のある中医学理論のみに拘るのではなく、人体の機能・構造を正確に捉えようとしている西洋医学とを融合させ、中西医结合によつて、よりリアルティのある漢方療法を実践していかねばなりません。

漢方薬局・薬店における漢方療法では、このような特徴があることを鑑みた上で、新しい中医学基礎理論を独自に構築することが求められます。

私は以上の考えから「中西医结合漢薬学」理論を作り、そして日々の漢方相談の臨床土台として弁証ならびに論治を行う際に活用していますので、皆さんの参考になれば幸いです。